

第1回委員会における協議内容・意見のまとめ

「学校評価の本質」をどのようにとらえるか

- 「値踏みをするため」ではなく、「支援する・支えるため」の評価
- 学校や児童生徒の教育内容を支え、よりよく改善するための評価
- 子どもたちを伸ばしていくための評価
- 育てたい子ども像や目標を設定し、達成に向けての取組や成果を把握するための評価
- 学校が子どもたちにとってよい環境にあるのかをチェックするための評価
- 教職員にとって元気が出る評価
- 学校と家庭が互いに連携・協力しながら子どもたちを育てていくための評価
- 学校を地域に開き、地域に根付いた学校にするための評価
- 保護者、市民の意識の違いや地域の特性を踏まえた評価

「数値による評価」と「質の評価」

- どのような項目が数値化して評価できるのか
- 数値的に処理しない、数値では表せない評価 ➡ 質の評価も必要
- 質をどのようにとらえ、どのような方法で評価するのか

外部評価委員会の位置づけや機能・運営上の課題

- 何を評価してもらうのか
 - 「事実」を評価するのか、「学校の自己評価の仕方」を評価するのか
- 評価者としての適性
 - どのような人に評価者を依頼すればよいのか
- 外部評価者の評価力量の向上
 - 学校を評価するという経験がない
 - ➡ 学校任せ、意見も出さない ➡ 学校への協力もそれほどではない
 - 評価の観点や指標が理解されない
- 評価の継続性
 - 何回か来てもらわないと、学校の教育活動がわからないままで評価してしまう
 - ➡ 子どもたちの活動を実際に見て、その姿を通して評価してもらうシステムを確立する ➡ 質の評価につながる
 - わからないままでよい評価を受けるより、教育活動を十分理解してもらった上で厳しい評価を受けた方が学校のためになる

保護者の意識

- 学校がアンケートを行う理由がわからない
 - 自分の不満をそのままアンケートに書いてしまう
- 学校の内情をわかっていないと評価ができない
 - 実際はほとんどわかっていない
 - 学校に何回も来ているわけではないのでわからない
- アンケートの項目
 - 何を聞いているのかわからない ➡ 適当に評価してしまう
- 「評価」という言葉に対する意識
 - 子どもの成績から「支援」より「選別」をイメージ

教職員の意識

- 評価は迷惑
 - 外部評価はやってほしくない
- 第三者の意見は受け入れられないが、保護者の意見は受け入れられる
 - 学校の内情や自分たちのことをわかった上で評価してほしい
 - 学校のためになる評価をしてほしい
- 「学校のためになる評価」だけを意識すると
 - 学校に対する甘い評価になるおそれ
 - ➡ 「学校だけに任せておけない」という意見がでる可能性

その他

- 世間の目
 - 学校はこれまで外部の目を排除し続けた結果、悪くなっている
 - ➡ 外部から外部評価や第三者評価実施についての圧力
- 具体的な目標・評価項目の設定率が低い
 - 教育目標は単なるスローガン、実際は何もやっていない
- 管理職の教育環境等の改善に向けた努力や工夫に対する評価も大切
 - 他校と比較すれば低い数値だが、自校の前年度数値よりは向上
- 数値化できないものをすべて言葉で表すと評価ではなく注文になる危険性
- 「PDCAサイクル」の確立
 - 小学校の校長の半数以上が、自校にサイクルが確立していると回答
 - チェックから始めることにより、具体的な評価の観点や項目が設定できる
- 保護者や地域の人に学校評価システムのねらいをどのようにしたら理解してもらえるのかを含めて検討する必要